

An aerial photograph of a city, likely Osaka, Japan. In the foreground, a large white bridge with multiple arches spans a river. The river flows through a residential area with many houses and some commercial buildings. In the background, a dense urban landscape is visible, with a tall skyscraper (the Abeno Harukas) standing out on the left side. The title '亀川遺跡の発掘調査' is overlaid in the center of the image.

亀川遺跡の発掘調査



2000. 3. 5
(財)大阪府文化財調査研究センター

はじめに

かめかわ

はんなん

じねんだ

亀川遺跡は大阪府南部、阪南市自然田にあります。今回、第二阪和

国道の延伸計画に伴って新しく発見され、発掘調査を行っています。

調査区の東を流れる菟砥川の下流には縄文時代の向出遺跡や弥生時代

を中心とする向山遺跡などがあり、南には玉田山古墳群があります。

また、遺跡の西側には波太神社があります。

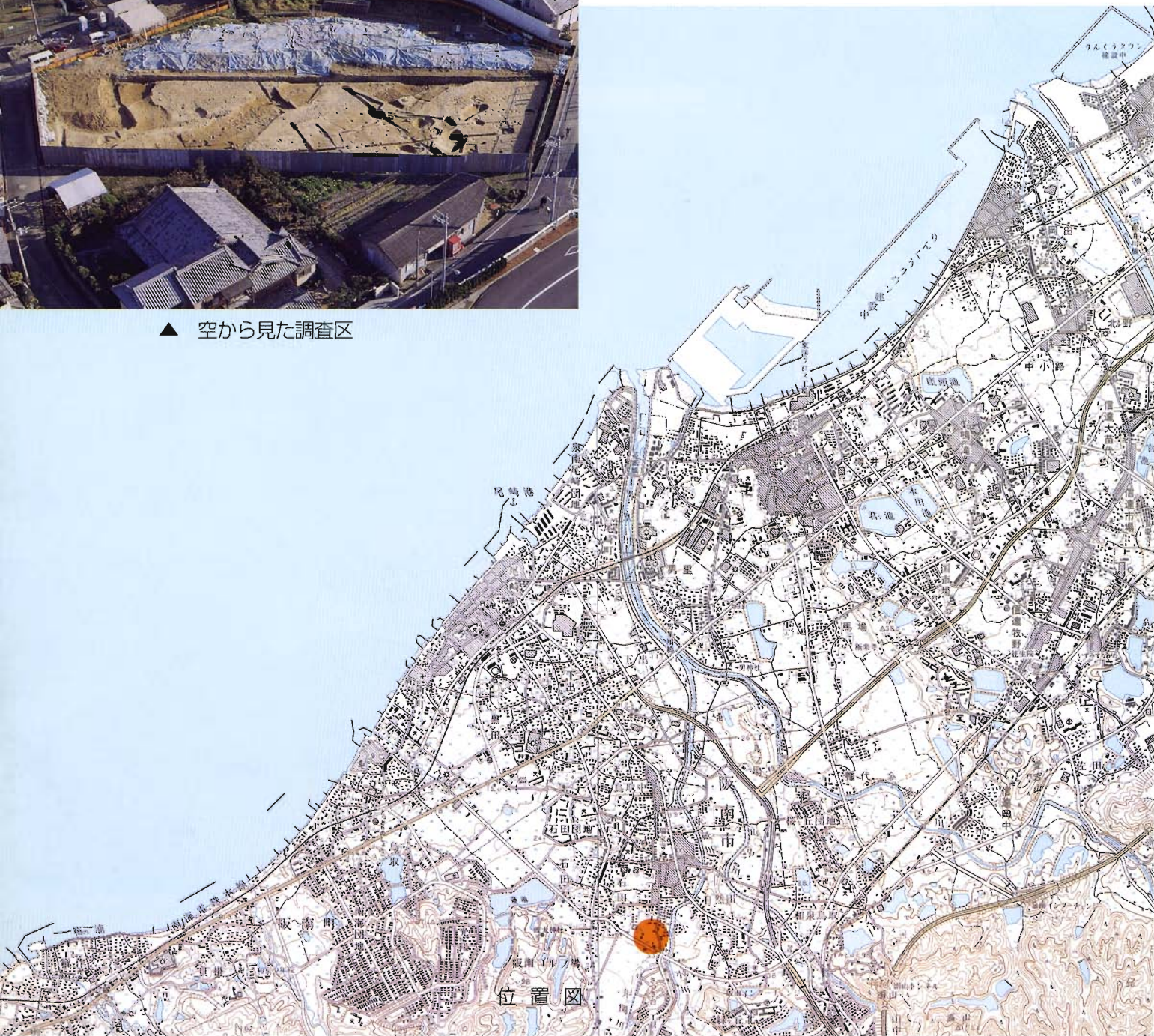
今回の調査では古墳時代のむらが見つかりました。竪穴建物の他に
滑石製玉類や製塩土器が多数出土し、工房をもったむらであったと考
えています。

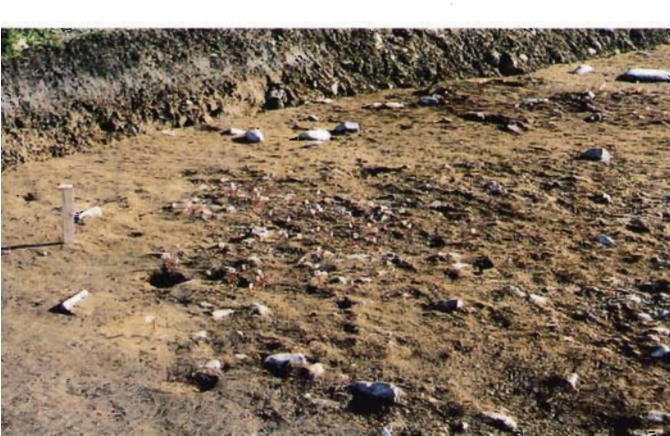
その他には、中世の掘立柱建物や奈良時代の溝などが見つかってい
ます。

▼ 古代の溝



▲ 空から見た調査区





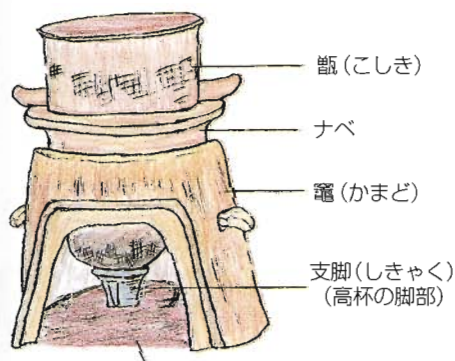
▲ 白玉出土状況 (赤旗は白玉の出土位置)



▲ 土器が多数出土した土坑

未製品を含め多数の白玉^{うすだま}などが出土しました。出土場所は径約10mの窪地^{くぼち}とその周辺です。特に窪地^{くぼち}の近くで滑石製玉類^{かつせきせいたまるとい}が集中して出土する場所があります。作業台^{こうぼう}的な石もあり、その付近に工房^{しやう}があったと考えられます。また、焼土坑^{やどこう}も多数みつかり、その周辺から製塩^{せいえん}土器^{どき}が多数出土しています。これらのことから、玉作りや塩作りに関わる作業が行われていたと考えています。

▼ 製塩土器が多数出土した窪地



火床で赤く焼き締まっている部分

▲ 屋外の (移動式) 竈 復元図

建物群の周辺には、屋外^{おくがい}に竈^{かまど}などがみられます。竈^{かまど}は支脚^{しきやく}として須恵器^{すえ}の高杯^{たかつき}や土師器^{はじき}の高杯^{たかつき}を杯^{つき}の部分を下にして逆さに使用していました。(イラスト参照) また、周囲からは甑^{こしき}や甕^{かめ}が出土しています。



▲ 屋外の

縄文時代の

土房をもつむら

滑石製玉類や製塩土器が窪地から多数出土し、その窪地を結ぶ道が見つかりました。建物は2ヶ所に分散して13棟見つかりました。屋外には竈や炉、作業場があり当時のむらの様子がよく分かります。



移動式) 竈の設置場所と支脚 ▲

▲ 焼土がつまった方形土坑



うどがわ
菟砥川

むかいで いせ き
向出遺跡

むかいやまいせ き
向山遺跡

かめかわ いせ き
亀川遺跡

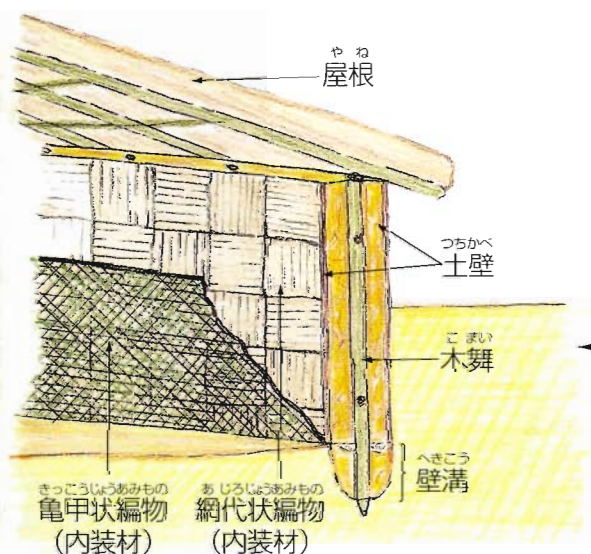


▲ しきゃく かまど
支脚のある竈



▲ 壁際に並ぶ土器

▼ つちかべたてもの
土壁建物復元図



たてあなたてもの つちかべ
縦穴建物の土壁を確認することができました。土壁は約10cm
ほどの厚みで外側には葦^{あし}と思われる炭化物が、内側にも同様の葦^{あし}
の炭化物やさらに植物を亀甲（カゴメ）状に編んだものがみられ、
これらは外・内装材として用いられたのではないかと考えていま
す。このように縦穴建物の土壁の構造を確認できた例は少な
く、貴重な成果といえます。



▲ たてあなたてものぐん
縦穴建物群（1区北）



▼ つちかべ
土壁が倒れた建物の断面

▼ きっこう
亀甲（カゴメ）状の編物





▲（作り付け）^{かまど}竈が張り出す^{たてあな}竪穴建物



▲ ^{しきやく}支脚を^{しょうど}焼土で^{こてい}固定する

建物いろいろ

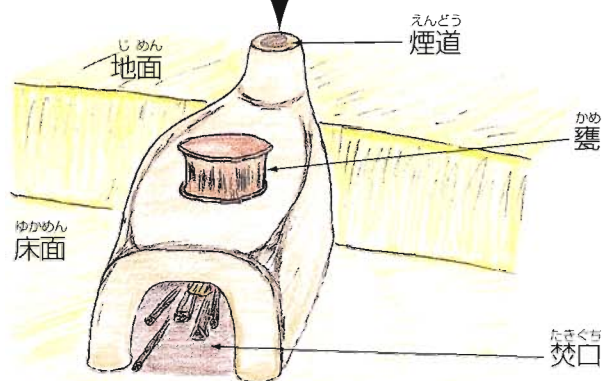
^{たてあな}竪穴建物は一辺が7.5mを超える大型のものから4mの小型のものまであります。その多くは建物の中に作り付けの^{かまど}竈が見つかります。竈は建物の外に張り出しているものや支脚が残っているもの、作り直しを行っているものもありました。

また、建物の内部に大きな^{くぼち}窪地があったり、床に石を並べるものがありました。このようなことから、一般の住居というだけでなく、何らかの作業も行っていたと考えられます。

それぞれの建物は床の上でほぼ完形の土器が多数見つかります。中には壁際の壁溝と呼ばれる溝に、多数の土器が落ち込んで見つかったものもあります。こうした建物は^{くさかべ}草壁のようなものであったと考えられます。



▲ ^{しきやく}支脚のある^{かまど}竈



▲（作り付け）^{かまど}竈 復元図



▲ 大・小の^{たてあな}竪穴建物



▲ 大型の^{たてあな}竪穴建物

出土した遺物

玉類は滑石製の多くは直径4～7mm程の白玉ですが、管玉や勾玉も見つかっています。また、穴を穿ただけの未製品も見つかっていて、ここで玉作りを行っていたことが窺えます。

製塩土器は塩を作る時に用いる非常に薄い土器です。底の丸いもの、脚台が付くものが出土しています。海岸から約2kmと離れてはいますが、出土している製塩土器の多さから、塩作りに関わる作業を行っていたと考えられます。



▲ 出土した滑石製玉類



▲ 脚台のある製塩土器

竪穴建物の床面で、様々な土器が出土しました。須恵器の杯、高杯、甕、甕などです。煮炊きに使われた土師器の甕や甑なども見つかっています。このように使用されていた土器が比較的たくさん出土したことで建物の時期をきめることができました。

▼ 支脚となった高坏



▲ 竪穴建物から出土した土器

まとめ

今回の調査では、古墳時代中期～後期にかけての玉作りや塩作りといった工房をもつむらが見つかりました。むらの中には、建物、竈、炉、集落内の道、作業場など色々な遺構があり当時のむらの様子がよくわかります。中でも、竪穴建物の土壁の構造や、竈の構造などを推測することができました。